

最後に、韓敏先生から、最近毛沢東を神様として奉っているという事例についての報告がありました。従来の農民の神様として、例えば関羽などと同じ地位に奉られることで、民衆側の価値観念についての報告があり、依然として変わらない儒教的な部分と共産党の統治下で変わっていく部分と、この2つの面からの分析がありました。

以上をまとめますと、エリートの文化と民衆の文化という視点、とりわけ今まで落ちている民衆の文化という視点から、どのように対象に迫るかという方法論の提起。これがまず1つです。2つ目に、改革と文化の変容をどのように考えるかという議論がありました。3つ目に、そのなかで、現代の改革開放以後の変革、文化の変容と、過去の変容を対比して、その特色はどこにあるのかについての議論がありました。時間の関係で詳しく説明はできませんでしたが、以上がわれわれの部会報告になります。



●司会— 馬場先生、どうもありがとうございました。引き続きまして、環境セッションの報告を、榎根先生からお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

◆分科会報告⑤◆

「現代中国とアジア世界の人口生態環境問題」研究会報告

榎根勇

<愛知大学>

●榎根— 榎根です。実は、この報告は藤田先生がなさる予定でしたが、急用ができて、私が務めることになりました。私はあとでもまた出ますが、決してたくさん話したいから出たわけではありません。藤田先生の事情はやむを得ない事情ですが、詳しいお話は「個人情報保護法」に触れるといけないので申し上げます。

私たちの環境グループは、ほかのグループと少しやり方が違います。環境グループは約15名です。人数が確定しているわけではありませんが、5人が愛知大学の関係者、5人が愛知大学以外の日本の研究者、それから5人ぐらいが中国からの方という構成で、よくバランスが取れ、自然科学・社会科学の方がミックスしています。

【図表1】は昨年の北京の会議のときのまとめとして、私がお渡ししたものです。環境グループの目的は環境改善技術の体系化です。これが体系化のひとつのかたちです。そのなかで、どのような研究がなされたかは個別の問題になってきます。

体系化する必要があると感じたのは、環境の研究に関しては、悠長に好きな研究をやっている時代ではないからです。中国の環境を研究するならば、中国の環境がよくならなければいけません。そのような戦略を練らないことには駄目だという立場です。

私たちは、一昨日の会議では、論文の発表ではなく皆さんの論文を読んで、互いに意見を言い合うという会議にしました。したがって、それをまとめることは無理ですので、要点だけをかいつまんでお話をすることによってさせていただきます。

北京の会議は中国人民大学の環境学院と共同で実施しました。発表された方が 20 名弱おられました。そのなかで、『現代中国環境論』にご執筆いただける方をお願いしたのですが、残念ながらそういう方はおられませんでしたので、私たちだけで最終報告書をまとめました。下線がついている方が環境研究グループのメンバーです。その方が、中国で発表なされたことをさらにブラッシュアップし修正をして、今度の最終報告書にまとめました。

私たちの目的は、最終報告書を中国語に翻訳して、中国で発表し、その内容を中国に行き配布することです。それで、12月15日、16日に北京の中国科学院の地理研究所の講堂で、2日間にわたって発表会を開きます。正式な発表は、そこで同時通訳でおこないます。そのときには、国家環境保護総局から2、3人の方に来ていただき、清華大学や北京大学の方にも来ていただいて、5人ぐらいプラスして実施するという戦略をとっています。

この一つひとつの枠は小さくてわからないと思いますから、枠ごと取り出したいと思います。

昨年の、中国の環境に関する政策の研究のまとめは、トップダウンは非常にうまくいっているが、ボトムアップが駄目だという結論でした。ところが、一昨日の議論では、「トップダウン」「ボトムアップ」という言葉で簡単にまとめることはできないのではないのかと。トップダウンでも、いろいろなかたちのトップダウンがあるということでした。

具体的に例を申します。私たちは麗江を調べましたが、麗江古城の町並みがきれいなのは、大きな地震のあとに地方の政府の厳密な指導のもとに、あのような町づくりを実施したおかげですから、まさしくトップダウンがなければあのような町はできません。

それを、私たちは「多段階トップダウン」と言いました。中央からの一方的なトップダウンでなく、各地方レベルのトップダウン、さらにその下のレベルのトップダウンです。だから、トップダウンが悪くてボトムアップがいいなど、単純には議論はできないと、いろいろありました。それは誠におっしゃるとおりです。

左のほうの縦軸は、環境についての日中協力をどうするのかという問題で、お二方にお話をいただきました。

先ほどの一番上の四角は「理念・哲学」です。それは私が担当しました。20世紀型の科学はもう行き詰っており、21世紀型の新しい知に基づいた新しい社会システムを構築しない限り、環境問題は常に後追いになり根本の治療にはならないというのが、私の考えです。

基礎研究をされた方はたくさんおられますが、自然に関するものと、中国の言葉である「和諧社会」、その2つのグループでご紹介いたします。

劉昌明先生は、中国の水循環、水資源、および生態保護について論文を書かれました。今日は、劉先生がいらっしゃいますので、討論の時間に補足的にお話しただけだと思います。ただし、劉先生の論文に対するいろいろな質問については、同じ機関におられる水の専門家の宋先生が代わりにお答えになり問題はありませんでした。

内嶋先生は、人間によるバイオマス資源の利用についてです。簡単に言えば、人類はほかの生物と一緒に太陽エネルギーの恩恵で生きています。その太陽エネルギーは、結局、バイオマスというかたちで、われわれのものになるわけです。そのうちの何パーセントまで人間が使ってもいいのか、もう限界ではないのかという議論を、非常にマクロな立場でなさいました。

それに対して吉野先生は、砂漠の水の問題や砂嵐を取り上げました。非常にミクロに、地域の問題は地域固有性があるのだから、そこまで下りて考えないと、細かい手当てではできませんという話をなさいました。

「和諧社会」については3人の発表がありました。「和諧社会」が、中国の環境政策のキーワードです。「和諧」という言葉を入れるよう私のほうから無理にお願いしました。

高先生は、中国北方草原の人と自然の和諧に関する若干の問題というテーマで発表されました。一ノ瀬先生は、中国の都市をめぐる人と自然の和諧の問題です。大澤先生は、和諧社会を目指す中国のエネルギー政策です。いずれにしても、努力はしているが問題は多いと、まとめさせていただけるでしょうか。

それから、環境の問題は制度設計がないと駄目です。私たちの環境改善技術の体系化は、結局は、研究がいかんして環境を改善するための制度設計に貢献できるかということです。私たちは政治家ではありませんし、お金も持っていませんので、知恵を出したものを制度の設計まで持っていかなければ駄目なのです。

魯奇先生は、過去50年間の現代化の進展と環境管理に、どのようなことがおこなわれ、どのような問題があるのか、非常に明確な指摘をされました。倉阪先生は、エコロジカル経済学というものをこれから確立しようと努力をしておられます。エコロジカル経済学とは、エンバイロンメンタル・エコノミクス（Environmental Economics：環境経済学）とは違うと主張し、ほとんどオリジナルの論文を出してくださいました。詳しくは、報告書をお読みください。鄒驥先生は、エコノミーとエネルギーと環境をどのようにして統括させていくべきかというお話でした。

その次に、それは社会システムの問題まで下りていきませんと、今度はボトムアップのかたちができませぬので、それについては3人の方の発表がありました。

宮沢先生は、日本と中国のNGO、NPO関係の現状の解析をおこないました。ところが、中国の現状では、NGO、NPO関係の活動はまだ弱いので、いわゆる日本で考えられているようなNPO、NGO関係の活動は、現実にはおこなわれていません。そういう指摘をなさり比較をされました。

藤田先生は、企業は社会的な責任を負っていますから、当然、企業活動のなかに、環境に対する何らかの積極的な行動がなければなりません、日本の企業は、環境のためにどのような行動をしてきたのかを、事細かにお調べになった例を話されました。ただし、日本の事例だけで中国の事例は入っていないので、これからの問題だろうと思います。

ある社会のなかに、外部からどれだけのものが入ってきて、どのように変質して、外へどれだけ出ていくのか、ものの流れとして社会を分析する、マテリアル・フロー・アナリシス（Material Flow Analysis：物質フロー解析）というアプローチがありますが、後藤先生は、そのアプローチで見て、少し違う立場で中国の現在の社会はどうなっているのかという話をなさいました。

鄧先生は、現実に中国の環境は改善されているのかについて、実際にずっと武漢市にお住まいでよくご存じということで、武漢市の社会経済進歩と環境保護についての研究を発表されました。

ご存じのように、武漢市はモデル都市ですから、環境政策は非常にうまくいっています。そのような武漢市の例で、汚染がどれぐらいよくなった、大気汚染がどのぐらい少なくなったな

ど、具体的な数字を挙げられました。

ところが、この発表があったとき、最近の武漢市の水汚染の問題で新聞ネタになったものが1つあります。「だから、そんなにうまくいっているわけでもないのです」という話もありました。

日中環境協力については、宋先生が日本の事情もよくご存じですので、その立場からお話をいただきました。柳下先生は環境省におられて、具体的に環境政策の立案もされ、その後の日中環境協力の日本側の代表者でもいらっしゃいましたので、そういうテーマでお話をいただきました。

柳下先生の結論は、日中の環境協力は新たな段階に入ったということです。具体的に言えば、これからはODA（Official Development Assistance：政府開発援助）で環境協力をするのではなく、水平協力、対等な立場で中国の環境をよくする方向に向かっていく段階に入ったのではないかという話でした。

これで全部です。

初日の私の発表のときに、「日本人が中国の環境の研究をして中国の環境改善にどのように貢献するのか」と、フロアの南開大学の楊先生から質問がありました。私たちは、具体的に中国の環境がよくなる仕掛けをしたいと考えています。12月15日、16日の会議のあと、何人かのグループは南京へ移動します。南京の秦淮河（シンワイガ）という河、内河と外河がありますが、南京大学の人たちと江蘇省の環境担当者の方と協力して、三者で「文」と「理」の側から知恵を出し合って、その河の水をきれいにするにはどのような方法があり得るか討論しようと計画をしています。そのように行動を伴うことを前提に研究をしています。これで終わらせていただきます。



●司会― 榎根先生、どうもありがとうございました。それでは、方法論のコメントを加々美先生からお願いします。

◆分科会コメント①◆

「中国学と現代中国学構築」研究会コメント

加々美光行

<愛知大学>

先ほど、金観涛先生に大変素晴らしいまとめをしていただきましたので、昨日の討論セッションでどのような討論がなされたかは、あれで十分ついていると思います。私が問題を出したからといって、必ずしもそれに沿って討論されたわけではありませんが、私の印象と問題提起